倉橋由美子文芸賞 選評

〈 渡辺 響子 〉

昨年は世相を反映してか、不安に衝き動かされて書いたような作品、極めて狭い世界を描いたものや、現実逃避的な作品が多かったが、今年度は普段から小説に親しみ、文章を書き慣れている人が多いように感じた。借り物のような文章の人は少なく、自分なりの小説観と、それを構築する固有の文体を手に入れつつある作品が多いという印象だ。

中でも、大賞の『少年の境界』はひときわ抜きんでていた。審査中、去年もよく似た作品を読んだような気がしていたが、受賞決定後に、昨年度も応募していた人だとわかり、見違えるほどの変化を嬉しく思った。比喩や描写も個性的でありながら突飛ではなく、文章そのものに牽引力があった。強いて言えば、都市・街・スラム、あるいは娼婦と聖女という図式が、ややクラシカルに映じるかもしれないが、タトゥーの目など、細かい布石も機能している力作だと言えよう。『眼光』は、過去二年、ファンタジー系の物語と並んで少なくなかった時代物。今年度は唯一の時代物だった。情景が思い浮かぶ安定した文章で、いい意味で淡々とストーリーが展開していくのが小気味よかった。狩のシーンも仏の顕現も「まなざし」によって通底していて違和感なく読めた。

『飛び立つ準備はできている』は、若者の悩みとその克服が等身大に描かれた爽やかな作品。素 直でてらいのない、まっすぐな文章で物語に引き込まれた。心地よい作品を書くのは苦しみを描 くよりもむつかしい。ましてや昨今の状況で爽快な作品を書き上げたことに拍手を送りたい。

『おはようユーグレナ』は、「ミドリムシ」ではない「ユーグレナ」が美しく自由で、清らかな 乙女たちと重なる。汚れてもまた何度でもユーグレナになれるというその特性で、非凡な作品に なったと言えるだろう。いぎたない教師も、まだ清められるかもしれないという希望の残る結末 に救われる。

個人的には、飄々とした雰囲気の『蟹缶忌』、今ならではの設定の『潮目』、時間ループをめぐる『ウロボロスの命日』にも惹かれた。

過去二年と比べ、どの応募作も時間と労力もかけているように受け止めた。一人で五本応募した人もいたようだが、それよりも一作の推敲を徹底した方が、よい作品になったのではないだろうか。来年度も若い力と可能性に期待している。

〈 井上 善幸 〉

今回大賞に選ばれた「少年の境界」について、語るべきことはほとんどないように思います。 すでに固有の文体を獲得されているのではないかと思うからです。これが大学生の駆使する文 体であることに驚きを禁じえません。描きたい内容なり主題があらかじめ存在して、それを文章 に移してゆく、というのであれば、不可能ではありますまい。ここではそうではありません。文 章が、言葉が作家の眼となって、世界を、情景を模索しつつイマージュを映し出してゆく、その 現場にいあわせるような感覚を覚えるのです。わが敬愛する澁澤龍彦でさえ、小説は作家が紡ぎ 出すフィクションというより、やはりエッセイストの文章たることを免れていないという印象 を受けますが、この作者の言葉は、そうではありません。廃墟のなかにうち捨てられたような卑 小な物から、聖なる存在にいたるまで、複雑に敷きつめられた音階がアラベスクのように描き込まれていると思います。その意味で、今回の応募作の中で群を抜いた小説作品に仕上がっていると思います。

「おはよう、ユーグレナ」も読ませます。語り口にある種の切迫感のようなものが感じられ、それがこの作品の魅力になっています。語るべき対象の実在性が示されるにもかかわらず、モノローグ的世界から出てゆかないところを評価します。いわば私語する自己意識が複数の他者に分裂し、それらとの不思議な出会いと対峙とが緊迫感を孕みつつ展開されてゆき、それらの他者が明け渡すことのない神秘を蔵したものとして立ち現われてきます。ミドリムシの学名がユーグレナであることを知って、この悲劇的ヴィジョンとも言える世界にほのかに明るい光をもたらしてくれているようで、そこに救いを見出しました。夕暮れと薄明とが連続しているようなユーモアも感じられます。

「飛びたつ準備はできている」は、淡い水彩画を見るような空気感を感じさせます。実際まどかは絵画部で絵を描いており、登場する人物はほぼ女性ばかりですが、どこかアセクシャルで、「きれい」なものが語り手の意識の中心にあるようです。この作品の一番の長所は、終わり近く、棒高跳び選手であるつばさに対する肯定の言葉に尽きるように思います。「『跳べます』まどかが言った。『先輩は跳べます』」。傷ついた小鳥のようなつばさの懐疑を前に、まどかの揺るぎない肯定性は、今の時代に切に求められているものではないかと思った次第です。

「眼光」は歴史小説で、十世紀に実在した源光を主人公に据えた物語です。近未来に設定された応募作が多い中で、このように古い時代の日本をその舞台に選び、落ち着いた筆致で墨絵のように描いているところに好感を持ちました。しかもこの主人公の内面にまで入り込み、死後も沼の中からわたしたちを見上げている主人公の眼で終わっています。この眼差しの存在に、作者の近代性を認めることができるように思います。

〈福間 具子〉

応募総数は37篇。全体的なレベルは高かったように思う。今や2年になろうとしているコロナ禍が良くも悪くも背景にあるのだろう。作品を濃縮させる閉じた時間があったであろう一方で、現実を取材しない、頭の中で作られた近未来的世界観の作品が多かった。新しい世界を設計できるのは文学の潜在能力のひとつだが、実際にはその新世界も人物も会話もいささか薄っぺらなものが多いのが残念だった。フィクションを創る際も、まずは現実をじっくり観察して欲しい。想像の入り口は現実の中にある。

大賞となった『少年の境界』は、細部に丁寧に魂を込めていて、流れるような文体と際立つ繊細なセンスが素晴らしかった。だからこそ結末にもう一段深まりが欲しかった。他の作品にも言えることだが、頂点には<死>しかないのだろうか。嬰児の生命には確かにこの上ない神聖さがあるが、それを失った母は死ぬしかないのだろうか。社会の底辺を描くならば、そこから立ち上がるちっぽけな生の尊さが見たい気もした。

佳作三篇もいずれも良作だった。

『おはよう、ユーグレナ』は「ユーグレナ」をモティーフに選んだ点で勝利だった。ミドリムシと、眠る汚れなき少女のギャップが秀逸だった。『飛びたつ準備はできている』は、読みながらアニメ風の情景が浮かんでしまうのだが、「一番星」という言葉に素直に心を揺さぶられた。

個人的に一番推したのは『眼光』であった。抑えつつも深い一文一文が素晴らしかったし、応募作の中では珍しく先が読めない点も良い。怨念の影が漂う展開も飽きさせないのだが、要所要所のイメージの絵画性が傑出していた。花を撒く仏が鳶へと変貌する様子、泥から眼光が差し続けるイメージは鳥肌が立つほど美しい。

受賞のボーダーライン上に位置していたのは『モフモフキマグレイトハキマリモモドキ』であった。文章力も構成力も優れていたが、題名をもっと無意味で不可解にした方が魅力は増したのではないか。他に『蟹缶忌』の雰囲気が良かったが、晴人にもう少し個性が欲しかった。『逆恨み』は身体論の教科書という設定に引き込まれた。結末にもうひとひねり見たかった。